京大広報

KYOTO UNIVERSITY

※ P5789 参照

※ P5786 参照

※ P5787 参照

2023.3
No. 767

目 次

［大学の動き］
- 京都大学ここのえ会主催講演会を開催 …… 5786

［部局の動き］
- ケンブリッジ大学生存リスク研究センター（CSER）との相互学術協定を延長 …… 5787
- 地球環境学堂・学舎・三才学林創立20周年記念式典および国際シンポジウムを開催 …… 5789
- 「八大学工学系連合会博士フォーラム」を開催 …… 5791

［寸　言］
自分の頭で考え抜く　森　一晃 …… 5793

［随　想］
春節の漢詩　名誉教授　金　文京 …… 5794

［洛　書］
古人との邂逅　池田　恭哉 …… 5795

［話題］
- 「京大理学部 知の真髄−玉城嘉十郎の２つの遺産」を出版 …… 5797

京都大学

大学の動き

京都大学ここのえ会主催講演会を開催

「京都大学ここのえ会（以下,「ここのえ会」という。）」は，本学出身の社会で活躍する，または活躍したいと願う女性が学部・研究科の枠を超えたネットワークを形成すること，女子学生や女性研究者等への緩やかな支援を行うことを目的に，2021 年 11 月 11 日に設立されました。

設立総会後，最初のイベントとして，2023 年 1 月 15 日に東京にて講演会を開催し，19 名が参加しました。

冒頭，浅山理恵 ここのえ会会長（SMBC オペレーションサービス株式会社 副社長）から挨拶があり，最近のここのえ会の活動として,「女子高生・車座フォーラム」に参加する高校生，保護者向けにビデオメッセージを寄せたことの報告がありました。

その後，石井クンツ昌子 お茶の水女子大学理事・副学長から「DEI（Diversity, Equity & Inclusion）時代の男女共同参画：大学の取組や研究に必要なアプローチとは」と題した講演が行われました。講演では，お茶の水女子大学の男女共同参画の現状と取組，ジェンダードイノベーション（積極的に性差解析を行い，研究，開発のデザインに組み入れ,「知の再編成」を促すことで創出されるイノベーション）の意義が紹介され，参加者は聞き入っていました。

続いて行われた懇親会では，野崎治子 ここのえ会副会長（京都大学理事）から冒頭挨拶があり，ここのえ会への期待が語られました。男女共同参画に熱い想いを持つ同窓生同士が時間を忘れて語り合った懇親会は大いに盛り上がり，久能祐子 ここのえ会理事（京都大学総長特命補佐）の挨拶で締めくくられました。

ここのえ会はこれからもネットワークを広げ，京都大学の男女共同参画推進事業の推進に貢献していきます。

開会挨拶をする浅山会長

講演する石井お茶の水女子大学理事・副学長

挨拶をする野崎副会長

閉会挨拶をする久能理事

講演会の様子

懇親会の様子

（総務部（渉外課））

目次に戻る

部局の動き

ケンブリッジ大学生存リスク研究センター（CSER）との相互学術協定を延長

総合生存学館（思修館）は，５年前に締結したイギリス・ケンブリッジ大学生存リスク研究センター（The Centre for the Study of Existential Risk：CSER）との相互学術協定を延長しました[※1]。

ケンブリッジ大学は世界最古の大学の一つであり，「2023年版THE世界大学ランキング」では３位となっています。イギリス伝統のカレッジ制を採用し，31のカレッジで形成されています。CSERはケンブリッジ大学内の機関であり，人類の生存リスクを研究するため，天文学者のMartin Rees 男爵らが中心になって2012年に設立，2015年より研究活動を開始しました。

今回の協定延長に際しては，山敷庸亮 総合生存学館教授がCSERを訪問して覚書に署名するとともに，“Prioritization of Different Kinds of Natural Disasters and Low-Probability, High-Consequence Events - How to prioritize space-based disaster at our “Space Age” and establish “Three-core” concept”（異なる自然災害と低頻度高結果イベントの順位付け，どのように「宇宙世紀」の我々が宇宙起源の災害について検討し，「三つの核心」コンセプトを確立するか）という題目で発表を行いました[※2]。

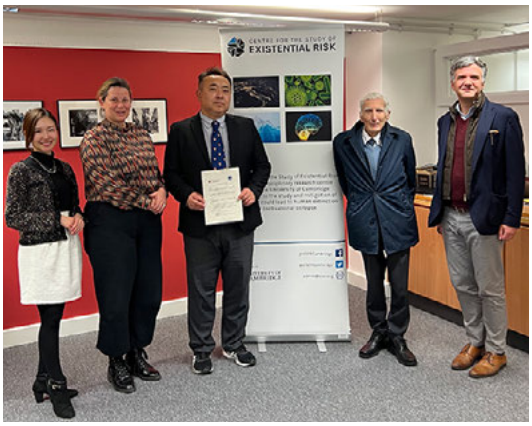
また署名式には，総合生存学館の学生であり，武者修行（国際研修）先候補としてCSERを訪問していた冨田キアナ氏も同席しました。ケンブリッジ大学アジア中東学部にて修士号を取得した冨田氏は，今回の協定延長に貢献し，今後の相互交流においても活躍が期待されています。

総合生存学館は2016年11月，CSERから２名の研究者を招へいして第５回国際シンポジウムを開催し，さまざまな災害リスクに活発な議論が繰り広げられました[※3]。また同年12月には，CSERにて開催の第１回国際シンポジウムに磯部洋明 総合生存学館准教授（現京都市立芸術大学美術学部准教授）が出席し，発表を行いました。

その後，2017年10月にRees男爵がSTSフォーラム参加のため来日された際に，総合生存学館・CSER間の協定について話し合いが行われ，（1）双方で共同研究について資金申請を行うこと，（2）共同研究ワークショップを定期的に開催すること，（3）教員の相互交流を推進すること，などで合意しました。2019年5月から2020年4月には，当時，総合生存学館の学生だった関 大吉氏（現九州大学学術研究員）が武者修行としてCSERに1年間滞在しました[※4]。

今回の協定締結により，（1）双方の大学院生と研究者の交流の促進，（2）共同プロジェクトの推進，（3）成果の出版の推進などが話し合われました。覚書を延長することで，CSER は総

左から，Jessica Bland CSER 副所長，山敷教授，Rees 男爵



左から，冨田氏，Bland 副所長，山敷教授，Rees 男爵，Julius Weitzdörfer 博士

部局の動き

合生存学館と，連鎖する自然リスク，コミュニティの対応，リスク軽減における宇宙技術の役割など，さまざまなテーマを通じて協力することが可能になります。また，双方の客員研究員や共同イベントから協定を進める予定です。

※1 CSERのサイトで以下のように紹介されています。
CSER extends MoU with Kyoto University's GSAIS
https://www.cser.ac.uk/news/cser-extends-mou-kyoto-universitys-gsais/
また，最初の協定締結について本学のホームページで以下のように紹介されています。
ケンブリッジ大学生存リスク研究センター(CSER)との相互学術協定を締結しました。(2018年1月19日)
https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2018-02-02-2

※2 主に以下の論文に関する内容を発表しました。
Moe Fujita, Tatsuhiko Sato, Susumu Saito, Yosuke A. Yamashiki (Corresponding Author) (2021). Probabilistic Risk Assessment of Solar Particle Events Considering the Cost of Countermeasures to Reduce the Aviation Radiation Dose. Scientific Reports. 11, Article number: 17091
https://www.nature.com/articles/s41598-021-95235-9
Moe Fujita and Yosuke Yamashiki, Prioritization of Different Kinds of Natural Disasters and Low-Probability, High-Consequence Events, Journal of Disaster Research Vol.17 No.2, 2022
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jdr/17/2/17_246/_article/-char/ja/

※3 第5回国際ワークショップに関する情報は以下に公開されています。
Fifth International Symposium on Human Survivability
https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/symposium2016/
Fifth International Symposium on Human Survivability “Disasters and Human Survivability: Enhancing Resilience to Risks Threatening the Future of Humanity”
https://ocw.kyoto-u.ac.jp/en/course/96/
成果の一部は以下で出版されています。
Journal of Disaster Research
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jdr/17/2/_contents/-char/ja

※4 CSERのサイトで以下のように紹介されています。
Centre for the Study of Existential Risk: Daikichi Seki
https://www.cser.ac.uk/team/daikichi-seki/
また，総合生存学館のホームページで以下のように紹介されています。
レポート 2019年度武者修行 (3)
https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2020/04/16/20200413

(総合生存学館(思修館))

目次に戻る

部局の動き

地球環境学堂・学舎・三才学林創立20周年記念式典および国際シンポジウムを開催

「2022年度アジアにおける地球環境学の教育研究に関する京都大学国際シンポジウム—地球環境学堂・学舎・三才学林20年の軌跡と将来展望」を，2022年11月24日，25日に北部総合教育研究棟益川ホールにて開催しました。

同シンポジウムは，地球環境学堂が設立当初より教育研究の国際連携を進めてきた活動の一環として，2015年から毎年開催しています。8回目となる今年度は，地球環境学堂・学舎・三才学林の創立20周年を記念して，24日に記念式典，25日に地球環境学の研究・教育の成果を報告・共有する国際シンポジウムという2部構成で開催しました。初日の記念式典は対面およびオンラインによるハイブリッド形式，2日目の国際シンポジウムはオンラインにより実施し，式典には235名，シンポジウムには354名が参加しました。

1日目の記念式典は，勝見 武 地球環境学堂長・学舎長による開会の辞から始まりました。第一部では，湊 長博 総長による基調講演，宇佐美 誠 地球環境学堂副学堂長による講演「地球環境学堂・学舎・三才学林の成果と展望」を行いました。最後は，海外連携9大学から寄せられた祝辞ビデオを披露しました。Tran Thanh Duc フエ農林大学長や，Sanara Hor カンボジア王立農業大学土地管理学部長，Nguyen Ngoc Tung フエ科学大学建築学部長らの地球環境学舎修了生をはじめ，各連携大学より数多くのメッセージが寄せられました。

第二部では，地球環境学堂･学舎が過去20年において取り組んできた国際連携活動について，講演およびパネルディスカッションを行いました。まず，藤井滋穂 名誉教授・客員教授が，ベトナムにおける海外連携大学との協働体制構築の背景と教育研究の成果について講演を行い，

開会挨拶を行う勝見学堂長

基調講演を行う湊総長

「地球環境学堂・学舎・三才学林の成果と展望」について講演する宇佐美副学堂長

20年間の国際連携活動について講演する藤井名誉教授

タイ・マヒドン大学との研究教育連携について講演する越後教授

部局の動き

続いて，越後信哉 地球環境学堂教授が，タイ・マヒドン大学との研究教育連携活動の成果報告として，オンサイトラボラトリー Mahidol環境学教育・研究拠点の取り組みや，京都大学とマヒドン大学のダブルディグリープログラムに関する成果について講演を行いました。その後のパネルディスカッションでは，地球環境学を発展させていくために今後求められる国際連携をテーマとし，藤井名誉教授および越後教授に加え，Suwanna Boontanon 地球環境学堂特定准教授（マヒドン大学准教授），藤枝絢子 京都精華大学講師，時任美乃理 地球環境学堂特定助教が参加し，小林広英 地球環境学堂教授の進行のもと，活発な議論を行いました。最後に，山崎 衛 地球環境学舎同窓会長による挨拶と，小林教授による閉会の辞をもって，初日は閉幕しました。

2日目は，まず地球環境学堂の3学廊（地球益学廊，地球親和技術学廊，資源循環学廊）に従い分けられた3グループでポスターセッションを実施しました。国内外の若手研究者から，近年の研究成果や教育・研究活動の展開について，82件の研究発表が行われました。続いてOral Research Sessionでは，「Global Environmental Challenges–A Multi-Disciplinary Perspective（コーディネーター：Baars Roger Cloud 地球環境学堂講師）」，「Plastics Management and Microplastics Issues in Asia（コーディネーター：田中周平 同准教授）」，「Natural Resources Utilization for Urban/Rural Development（コーディネーター：西前 出 同教授）」という3つのテーマが企画され，各セッションで3～4名の研究者が最新の研究発表や話題提供を行いました。

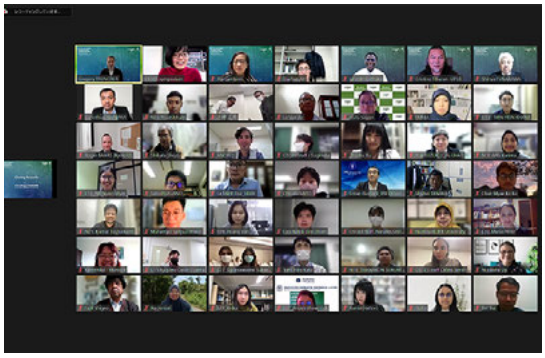
最後に，舟川晋也 三才学林長による閉会の辞をもって，2日間にわたる記念式典および国際シンポジウムは閉幕しました。

パネルディスカッションにて海外連携大学との研究協働について発言する時任特定助教

パネルディスカッションにて国際教育連携や人材育成について発言する藤枝講師

パネルディスカッションにて最先端研究につながる国際教育連携の形について発言する Boontanon 特定准教授

記念式典における集合写真


国際シンポジウム 閉会式の様子

部局の動き

本記念式典および国際シンポジウムは，「環境の世紀」と呼ばれる21世紀の始まりと同時期に発足した地球環境学堂・学舎・三才学林の20年のあゆみを国内外の関係者と振り返る節目の場となったことはもちろん，さらなる地球環境学の発展に向けて，地球環境学堂が今向き合うべき課題を確認し，展望を分かち合う貴重な機会となりました。

特に，流動分野制度を活かした学際研究や，地域の課題解決にも注力する実践的研究を，今後もより一層強化し深化していくことに加え，国際連携のさらなる発展や，国際的リーダーシップを発揮できる人材の育成，さらには若手教員，女性教員，外国人教員といった多様なアクターが活躍できる，多様性を尊重し促進する研究科を目指していくことは，今回の記念式典およびシンポジウムにおいて掲げられた，地球環境学堂が目指すべき重要な課題です。この20年間の成果を財産として，今後も地球環境学堂のより一層の教育研究活動の発展に努めます。

（大学院地球環境学堂）

目次に戻る

「八大学工学系連合会博士フォーラム」を開催

「八大学工学系連合会博士フォーラム」を船井哲良記念講堂およびオンライン参加によるハイブリッド方式で，12月9日に開催しました。本フォーラムは，一般社団法人八大学工学系連合会の事業の一つで，本学が幹事校となり実施したものです。当日は対面，オンライン合わせて130名以上の参加がありました。

今回のテーマは「日本が描く博士の未来 ～博士号取得者をどうしたいのか」とし，企画運営を本学博士後期課程の学生が担当しました。

はじめに椹木哲夫 工学研究科長より開会挨拶があり，次に鈴木 顕 文部科学省高等教育局専門教育課企画官と古藤 悟 一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会（C-ENGINE）理事より，博士後期課程学生への支援やアカデミア以外のキャリアについて，行政，産業それぞれの視点から基調講演がありました。

その後，椹木研究科長，鈴木企画官，古藤理事に加え，飯田和則 株式会社EXELIM代表取締役，関根千津 株式会社住化技術情報センター代表取締役社長を迎え，パネルディスカッションを行いました。ファシリテーターを塩瀬隆之 総合博物館准教授が務め，活発な意見交換が行われました。続いて，登壇者と参加者が少人数のグループに分かれて討論し，さらにテーマを深めました。

開会挨拶を行う椹木研究科長

基調講演を行う鈴木企画官

基調講演を行う古藤理事

部局の動き

最後に実行委員長である杉野目道紀 工学研究科副研究科長より閉会挨拶があり，記念撮影を実施しフォーラムは終了しました。

本フォーラムを通じ，大学や研究分野を超えた参加者のネットワーク形成と，キャリアパス再考の一助となることを期待しています。

パネルディスカッションの様子（その 1）

パネルディスカッションの様子（その 2）

パネルディスカッションの様子（その 3）

閉会挨拶を行う杉野目副研究科長

記念撮影写真

（大学院工学研究科）

目次に戻る

寸　言

自分の頭で考え抜く

森　一晃

私はさして運動神経や身体能力が高い方ではないのに，浪人時代の鈍った体を何とかしたい，阪大サッカー部OBの父の影響，スポーツ自体は嫌いではない等から不遜にも体育会サッカー部に入部した。大学生活はどこかの集団に属した方がなにかと経験できるだろうといういい加減な理由もあった。ただこんな人間でもまがいなりに4年間部活動をやり通せたのは懐の深い京大の伝統のお陰だと感謝しております。

そこには個性的な者たちが集まる濃密な人間関係があった。しかしそれはどこの学校でも人が集まればそれぞれに個性があるのは当たり前なので取り立てて言うことでもないが，京大で私の属した集団は何事も自分たちで考え，決めて行うということへのこだわりの強さに特筆すべきものがあった。指導者風な人からの指示を言われた通り鵜呑みにしてやるという高校の延長線みたいなやり方はもう飽きたと，練習メニュー，試合日程等すべての活動内容を自分たちで決めていた。自分に甘くならないか，それだけを心配した。専門家からみれば幼稚であったろうし，他人に誇れるような結果は全く残せなかったが，自分以外の人から言われたことを自分の頭で考えずにやることに極度のアレルギー反応を示す集団であった。自分たちに自信があったわけでもないし，今から思えばもうちょっと人の意見を聞いたり，調べたりすればよかったかなと思わなくもないが，とにかく自分の頭で考え抜くことを良しとした。人の言いなりで勝つくらいなら自分で考えて負ける方がましと言えば言い過ぎかもしれないがそんな雰囲気に満ちていた。私はこの集団で学生時代を過ごせたことを幸運に思う。自分の頭で物事の善悪を考え抜ける人が社会の役に立つ人であるからだ。監督と称する人からの反則まがいの指示を勝つために盲目的に実行する類のこととは全く無縁であった。社会にとって全く不幸でしかない戦争の指示者の指示に従い，ミサイルの発射ボタンを押す人の頭の中は物事の善悪を考え抜いているのだろうか。色々事情はあろうが，理屈は同じだと感じる。有効な技術を持つ人でも自分の頭で物事の善悪を考え抜かなければそんな人は何人いても社会の害になりうるだけだ。私たちのような人がいれば世界は平和だなどと大それたことを言うつもりはないが，特にこのご時世では本当に大事なことだとつくづく思う。

これはあの時のサッカー部だけの特徴ではなく「京大」が醸し出すオーラみたいなもので学内の他の集団でも同様なことが起きていた，いると思われる。これが大学教育というものの一部であるなら大切にして頂きたい。教官がたとえ付いていなくても「オーラ」で自分の頭で物事の善悪を考え抜く人間を育成する社会の役に立つ大学として発展して頂きたい。

（もり　かずあき，ナビオコンピュータ株式会社代表取締役社長，昭和62年工学部卒業）

目次に戻る

随想

春節の漢詩

名誉教授　金　文京

コロナ以前までは，毎年数回は学会や講演などで中国に出かけていた。八十年代から改革開放がはじまった中国は，一方では昨今の復興中華にもつながる復古ブームでもあり，私の同業の知人たちの間では，むかしの漢詩を作ることが流行っていた。そこで私もいつしか彼らといっしょに漢詩を作るようになり，旧正月の春節には，毎年その年の干支の動物に因む漢詩を年賀状代りに送るのが恒例となった。今年の春節は一月二十二日，干支は癸卯，うさぎ年なので次のような七言律詩を作った。仮りの訓読もそえる。

虎嘯銷声狡兎来。疫情依旧更為災。	虎の嘯（うそぶき）は声きえて狡兎来る，疫情は旧に依りて更に災いを為す。
角生兵象幾時了，口缺芻言無処開。	角生えて兵象はいつの時かおわらん，口缺けて芻言は開く処なし。
万事紛紛誰可必，百年忽忽実堪哀。	万事紛紛として誰が必す可けんや，百年忽忽として実に哀れむに堪えたり。
迎春把酒指天問，仁愛恤民何在哉。	春を迎え酒をとりて天を指さし問う，仁愛もて民をいつくしむはいずこに在りやと。

大意は以下のとおり。虎のほえる声が消えて，ずるい兎がやって来た。兎は古来，臆病でずるい動物とされている。虎も退治できなかったコロナは依然収まらず，さらに別の災いが増えた。兎に角がはえるなどありえない，それが万一はえれば兵乱の兆しであると，古い本に書いてあるが（日本語の兎角の由来である），誰もがまさかと思った戦争が起こり，いつ終わるとも知れない。言論の自由がないので，政府への建言（芻言）は思うだけで，口を開いて言うところがない。万事複雑怪奇に入り乱れ，誰も必ずこうなると予測できない今の世界，その中で長くても百年の命が忽々と過ぎて行くのはまったく哀しいことである。新春を迎え，酒を酌んで祝う前に，まず天を指さして問いたい，天は仁愛の心をもって民をいつくしむというが，その心はいったいどこにあるのかと。

昨年末に突如ゼロコロナ政策を解除し，民族大移動と言われる春節にはどうなるかと心配したが，幸い今のところは大丈夫のようである。しかしこれまた突如ビザ発給を停止したかと思うと，すぐ再開したり，アメリカに気球を飛ばしたりと，紛争の種はつきない。ウクライナの戦争は先が見えず，トルコ，シリアで大地震が起きても戦火はやまない。七十を過ぎ，あとは年金で清閑の日々を送ろうと思っていたが，それもだんだん怪しくなってきた。子丑寅卯と，これで四年連続コロナの詩を作ってしまった。来年こそは正月らしい，めでたい詩を書きたいものである。

（きん　ぶんきょう，平成 27 年退職，元人文科学研究所教授，専門は中国文学）

目次に戻る

洛　書

古人との邂逅

池田　恭哉

中国は5・6世紀、南北に分裂する南北朝時代にありました。その南北両朝を流転した顔之推（531-591頃）は、激動の時代の波に呑み込まれた体験を多角的に省察し、折に触れて文章化し、それが結実したのが『顔氏家訓』20篇です。この文献は題名に「家訓」とある通り、当面の対象は顔之推の子孫でしたが、中国では「家訓の祖」と称され広く読まれました。そればかりか日本にももたらされ、江戸時代に訓点を施した版本が複数刊行されたほどに読者を獲得し、現在でも数種類の現代日本語訳が出版されています。

さて時は2006年夏―私は当時、修士課程に進学したばかりで、漠然と南北朝時代のことを研究しようと思いながら、なお明確な対象は定まっていませんでした。買い物のために立ち寄った大阪の某百貨店、その催物会場で開催中の古書即売会に出向いた私は、日本で訓点を施して出版された『顔氏家訓』の内の一つ、文化7年（1810）刊行のものを、たまたま目にしたのでした。それが南北朝時代の文献だとの知識は持っており、手にとってめくると、何だか色々と筆で書き込みがしてあり、随所にメモ書きのなされた和紙が付箋されてもいます。そう安くはなかったはず（値段は忘れてしまいました）ですが、どこかたまらなく惹き付けるものがあったその『顔氏家訓』を、私は思い切って購って帰りました。

京都の自室で早速紐解くも、情けないことに当時の私は活字化されていないテキストの読解は経験に乏しく、書き込みや付箋の内容がわかりません。そこで先輩の力を借りつつ、その文字起こしをしていくと、誰かが講義を聴いた際のメモでしょうか、時に「先生云」などとありました（京都に現存の某寺院の蔵書印が見えますので、そこで学んだ人の筆かもしれません）。

書き込みや付箋の内容は、当然それが施された元の『顔氏家訓』の内容と対応しますから、私も一緒になって『顔氏家訓』を読むことになります。最初は書き込みのある箇所だけ読んでいたのですが、自然とそれらがない箇所も読み出し、いつしか『顔氏家訓』の虜になった自分がいました。その結果、私は顔之推の『顔氏家訓』執筆の動機を考察して修士論文にまとめ、さらにそこに描かれる南北朝時代の諸相を、その他の史料のそれと対応させながら研究を進めまし

家蔵『顔氏家訓』の一葉に見える書き込み

洛　書

た。余談ですが書き込みの中には、従来の『顔氏家訓』の注釈書や先行研究に指摘のない内容が含まれ、それが論文のヒントになったこともあります。

現在では必ずしも『顔氏家訓』のみを研究対象としているわけではなく、それを読むにしても専ら現代の校訂本を用います。しかし時折2006年夏のあの日から私の書架に帰した『顔氏家訓』を見ると、顔之推と彼が生きた時代、そしてそれを受容した中国や日本の歴代の人々、さらには私自身という存在が、一つの文脈の中に置かれているように感じます。こうした古人と何かを共有しているとの感覚が、私を研究へと駆り立ててくれるのです。

（いけだ　ゆきや、大学院文学研究科准教授、専門は中国哲学史）

目次に戻る

話題

「京大理学部 知の真髄－玉城嘉十郎の２つの遺産」を出版

理学研究科は，本学理学部において理論物理学を講じた玉城嘉十郎の没後，ご遺族からの寄附により創設された「玉城記念講演会」が2019年に50周年を迎えたことを機に，書籍「京大理学部 知の真髄―玉城嘉十郎の２つの遺産」を2022年12月30日に出版しました。

「２つの遺産」とは，湯川秀樹，朝永振一郎をはじめ，玉城研究室から紡ぎ出されたノーベル賞受賞者の系譜と，偉大な教育者であった玉城嘉十郎を記念して，すぐには実らなくても測ることができない成果を期待して広く基礎科学の話を聞こうと始めた講演会のことです。本書では，この２つの遺産に焦点を当てつつ，新しい科学の世界を切り拓いてきた本学理学部の知とは何かについて考えます。

「京大理学部 知の真髄―玉城嘉十郎の２つの遺産」書影

もっとも，常識にとらわれず，何かおもろいことをやろう，という本学の学風，そこで躍動する研究者の姿を「変人」あるいは「アホ」として表現することは人口に膾炙（かいしゃ）しています。しかし,「変人」や「アホ」は一表現形に過ぎません。本学の知を語る根源的な言葉を探したい，それが本書が目指すものです。

科学は人と人が出会い，影響を与え影響を受けて紡がれていくものです。本書では，新たな学問分野の開拓のもとにある人間ドラマや，日々の研究室風景の中から本学理学部らしさとは何かを考え，本学理学部の知の真髄に迫ろうとしました。

なお，本書は玉城記念講演会事業の一環として，公益財団法人湯川記念財団の助成を得て出版されました。

（大学院理学研究科）

目次に戻る

京大広報
No.767
令和５年３月25日　発行
発行　京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
※ご意見・ご感想をお寄せください。
「京大広報」の既刊号は，次の URL でご覧いただけます。
https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/